

ガヴァネスとしてのジェイン・エア

生 田 理 恵 子

1. はじめに

‘A young lady accustomed to tuition’…’ is desirous of meeting with a situation in a private family where the children are under fourteen.’ …‘She is qualified to teach the usual branches of a good English education, together with French, Drawing, and Music’… ‘Address J.E., Post Office, Lowton,—shire’⁽¹⁾

‘If J.E. who advertised in the—shire *Herald* of last Thursday, possesses the acquirements mentioned; and if she is in a position to give satisfactory references as to character and competency; a situation can be offered her where there is but one pupil, a little girl, under ten years of age; and where the salary is thirty pounds per annum. J.E. is required to send references, name, and address, and all particulars to the direction: “Mrs Fairfax, Thornfield, near Millcote, —shire”⁽²⁾

生後まもなく両親を失い、孤児となったジェインは、ゲーツヘッドにある、遠縁のリード家に引き取られる。そこでは、ジョンやその妹たちにいじめられ、厄介者として扱われる。やがて牧師ブロックルハーストを校長とするその慈善学校ローウッド学院に送られ、教育の名の下に生徒たちに厳しい規則と儉約を強いる環境で、ジェインは寒さに凍え、ひもじさに苦しみながらも、ヘレン・バーンズという友を得、テンプル先生に認められ成長していく。十八歳になったジェインはそこで教師として働いていたが、テンプル先生の結婚を機に学院を離れ自らの運命を切り開いていくことを決心する。働き口を考えたジェインが思いついたのはガヴァネスであった。上に引用したのはその広告とそれに対する申し出である。このようにしてジェインはガヴァネスとしてソーンフィー

ルド館に住み込み、主人のエドワード・ロチェスターと運命的な出会いをすることになる。

『ジェイン・エア』の作者シャーロット・ブロンテ (1816~1855) は、なぜ主人公に職業としてガヴァネスを選ばせたのだろうか。また、1814年から1865年にかけてガヴァネスを主人公にした小説が140も書かれた事実を考えると（それもほとんどが女性作家によるものである）、作家シャーロット・ブロンテが生きていた時代におけるガヴァネスの地位、ガヴァネスの存在が重要な意味を持つように思われる。あわせて彼女が描くガヴァネスがほかの作家たちとどう違うのかを見るとそこに小説『ジェイン・エア』での彼女の意図するところが出てくるのではないかと思われるので、まずこの時代におけるガヴァネスの実態—どのようにしてガヴァネスという職業が成り立ってきたのか、その社会における地位、実情—を調べ、次にほかの作家との違いをみるために、同じくガヴァネスを主人公にした、シャーロット・ブロンテの妹、アン・ブロンテによる『アグネス・グレイ』を比較のために取り上げてみたいと思う。

2. 「ガヴァネス」出現まで

ガヴァネスという言葉は、正確には今いうところの家庭教師に当たるものではない。住み込みの女性の家庭教師のことである。OEDによれば、この語は3つの意味があり、① govern (支配する) という意味から‘女性支配者’という意味になったが男性支配者が多くなってこの言葉は廃れてしまう。② a. 他人、特に若い人を預かりまたは監督する女性 b. 女性教師、今日では主に私的な家庭に雇われている女性教師。③ 地方長官の妻とあり、この二番目の女性教師の初めての用例が1712年で、このころから家庭に住み込みの女性家庭教師、ガヴァネスという言い方が出てきたと思われる。ガヴァネスがその意味に変わってきた成り立ちを、アリス・レントン著、『歴史の中のガヴァネス』、⁽³⁾川本静子著、『ガヴァネス』⁽⁴⁾に沿ってみたい。

ガヴァネスの原型

自らガヴァネスを体験した作家アナ・ジェイムスン (1794~1860) によると、ミネルヴァ神で、彼女の仕事はミューズ神とグレイス神の監督及びパンダロスの娘に糸を紡いで織ることを教えた。学芸の神様であったこの女神の多面性にもかかわらず、良妻になることを教えたこと、ミネルヴァ自身が永久に独身で

あったこの二つの点でガヴァネスの原型として適切といえよう。

イギリスのガヴァネス

イギリスにおいて最初のガヴァネスとして考えられるのは、尼僧院の修道女である。アングロ・サクソンの時代に、バーキング女子修道院長ヒデリス、修道院付属教会堂の修道女エドヴァーガーが、後輩の修道女や王女たちに読み書き、ラテン語、聖書、糸紡ぎ、刺繍を教えた。

< 8 世紀 > —— 尼僧院から宮廷に

自分の娘に十分な教育を与えるべきと考えた、歴史に記録された最初のヨーロッパ人、カール大帝(742～814)に影響を受けたアルフレッド大王(849～899)が宮廷付属学校を作り王や貴族の子弟の教育にあたらせた。彼は一般的慣行であった修道院での教育よりも家庭での教育を考え、また、文学上の教育は姉妹も兄弟と同じであるべきと考えた。

アルフレッド大王の息子エドワード長兄王は、父親同様、城内に勉強部屋を作り、8人の娘と息子に教育を受けさせた。その際エルフジフ(エルフギフ)がガヴァネスとなる。彼女がおそらく初の王室付ガヴァネスである。

< 14 世紀後半 > (レディ・カヴァネス)

レディ・ガヴァネス(王室付ガヴァネス)が出現、王子、王女の衣服・食事、チューター(男性家庭教師)の教育など一切を管理した。その責任と影響力は大きく、聡明さ、如才なさ、宮廷の慣習に精通していることが求められた。その代表的なレディ・ガヴァネスは、ランカスター公爵家(ジョン・オブ・ゴント)のガヴァネス、チョーサーの義理の姉妹、キャサリン・スウィンファード(スウィンフォード)(1350～1402)である。

< 15 世紀 > (「カヴァネス」ということばの出現)

「ガヴァネス」という用語が使用されるようになったのは15世紀で、王侯貴族の場合、通常は、親が直接子供の教育にはあたらず、比較的身分の高い者を養育係としての任にあたらせ、子供の福利全般に責任を持ち、その教育指導にあたらせた。一方親元におかず、他家に預ける習慣もあり、エドワード・グレッグによると、「王族の子供が両親の元を離れて別の家に預けられると、そこにはガヴァナーとガヴァネスと呼ばれる夫婦がいて、彼らが親代わりとなって擬似家族を形成」したという。こうした事情で子供を支配し監督する立場にあるという意味で教育に当たるものは、ガヴァナー、ガヴァネスと呼ばれたのであろう。彼らが宮廷や貴族の館に同居した時、住み込み家庭教師の始まりとなり、

自らの館に子供を託されたとき、寄宿学校の起源となったと考えられる。

しかしながらガヴァナーはその後教師を意味する言葉とはならなかった。1788 年以降チューターという言葉に変えられていく。ガヴァネスのほうは、チュートレスという言葉があったのだがそれは使われず、18 世紀 (1712 年) には主に女性家庭教師を意味するようになっていった。

<16～18 世紀> (有給カヴァネスの登場)

ミストレス・ハムブリンが、伯父サー・ヘンリー・シュリントンの子供 (すなわち従妹) を教え、約 20 ポンドの報酬を受けて、ここに有給のガヴァネスの登場が始めて出現する。そしてこの時代以降上流階級の家ではガヴァネスを雇うことが慣行となる。しかし「ガヴァネス」という言葉は、まだ、女子の学校を経営するかそこで教える女性のことを意味し、家庭において私的にガヴァネスを雇っていたのは、王族か貴族階級だけであった。

18 世紀になると娘を寄宿学校に入れるのが流行したが、衛生状態がよくなり、裕福な家では、教育を家庭で行い、ガヴァネスに任せた。女性作家マライア・エッジワース (1767～1849) の言葉『私の育った頃にはガヴァネスは上級の雇い人としてではなく、レディとして扱われました』から分かるように、この頃のガヴァネスは敬意を払われていた。

<摂政時代 (1811～1820) からヴィクトリア時代>

(家庭における個人教師としてのカヴァネス)

これは、ほぼ『ジェイン・エア』の時代に当たる。裕福な中産階級もガヴァネスを雇うようになってきて、ガヴァネスの扱い方に変化が出てくる。19 世紀以降は「ガヴァネス」は、通常、家庭における個人教師を意味するようになる。19 世紀および 20 世紀初頭が、イギリスのこの意味でのガヴァネスにとって全盛期であった。レディ・イーストレイクは次のようにガヴァネスを定義している。

「ガヴァネスの真の定義は、イギリスでは、生まれ、振る舞い、教育の点で私たちと対等であるものの、財産の点で私たちに劣る人のことである。生まれも育ちも、言葉のあらゆる意味において、レディである人を例にとろう。彼女の父親が失職したとしよう。すると、このご婦人は、私たちが子供たちの教育者として考えている最高の理想像にぴったりというわけだ。ガヴァネスという収穫を刈り取るには、何人かの父親が軽はずみ、浪費、誤り、罪などを犯すことによって種をまいておいてくれる必要があるのだ。このように同胞の不幸に

よって供給される仕組みになっている雇用労働者は、ほかに類がない。」—彼女のエッセイ、『『虚栄の市』、『ジェイン・エア』およびガヴァネス互惠協会』（『クウォーターリー・レビュー』1848年12月）—⁽⁵⁾

レディ・イーストレイクの引用から、ガヴァネスとは一言で言えば、生計の資を得るために教師として働くレディのことであり、住み込みの家庭教師＝ガヴァネスで、それもかなり悲惨な状況からガヴァネスとなった人がいたことがわかる。一方、この時代台頭してきた上流志向の中産階級が旧来からあった宮廷ガヴァネスの慣行を盲目的に模倣して、ガヴァネスを自分たちの社会階層のステイタス・シンボルとして取り入れ、一定のレベルの収入と社会的地位のある家庭の不可欠な要員とするようになっていた時代背景もあり、ガヴァネス職を求める人と雇う側が存在する、いわゆる需要と供給の関係から私的「ガヴァネス」がここで登場するようになったと考えられる。このような状況をもたらしたのは、産業革命がもたらした社会の変化であった。

3. 職業としてのガヴァネスをもたらした社会背景

一般に産業革命の時代は、18世紀後半から19世紀前半といわれ、機械制大工業の成立によって、それまでは部分的であった資本家と労働者の関係が社会的に全面化し、従来からの支配階級であった土地所有者（地主）を加えた三大階級社会が完成した時代であった。シャーロット・ブロンテが生きたのはこの時代で、産業革命が次第に進み、産業資本家の力が強大になり、土地及び商業資本に取って代わろうとした時代であった。この産業革命においては、今日想像もできない程の社会構造の変革をイギリスにもたらした。それまで生業としていたものを覆された者はかなりの数にのぼり、農業および手工業に従事し、その日の糧を得ていたものたちの多くが仕事を失い、手工業では、働き手が以前は男性の熟練工であったのが、機械化の時代では、単純労働者として女性・子供が使われるようになった。一方、農業では、囲い込みにより、農地を失った農民が多数出て都市に流れ込んできた。（総人口に対する都市人口、19世紀初め；30%、19世紀末；70%）その結果、一握りの豊かな中産階級と貧しい労働者、失業者、浮浪者の階層の二分化が起こり、都市には失業者があふれ、この当時の社会的混乱と下層階級の人々の悲惨さは、想像を絶するものであった。ブロンテが生きたこの時代は、大英帝国が栄光に輝き、途方もなく豊かな上流、

中流階級が存在する一方で、その日の暮らしにも困る、貧困にあえぐ労働者階級、下層階級が存在する、激動の、矛盾と不条理に満ちた時代といえる。長島伸一著、『大英帝国』に沿って階級をまとめてみると次のようになる⁽⁶⁾。

まず、上流階級。1803年には、2700世帯、人口の約2%。その構成員は、1万エーカーを越える私有地を持ち、年間1万ポンド（現代のお金に換算すると、200万ドル）を上回る収入を生み出す資産を持つ爵位貴族階級と、1000～10000エーカー、年収、1000～10000ポンドのジェントリー階級。この二者でイギリス全土の三分の二を所有していた。さらにこの二者の一段下、中産階級との境界線上に年間生活費、約700～1000ポンドの地主階級（スクワイヤラーキ）ないしは労働の必要のない自立紳士階級がいた。

次は、中流階級。635,000世帯（1867年には、1,546,300世帯）、19世紀半ば平均年収；150～1000ポンド（現代のお金に換算すると3万ドルから20万ドル）で、経済的段階で分けると、①大貿易商、役人、判事、製造業者、商人、実業家など②小工場主、銀行家、ビジネスマン③旧来の商業的プロフェッション（穀物業者、反物業者など）、旧来のプロフェッション（軍隊、教会、文官職、法律など）、新興プロフェッション（医師、事務弁護士）④会計士、技師、教師、ジャーナリスト、作家⑤下級文官、事務員、事務所労働者、教員、鉄道職員、劇団員、精神病院経営者となるが、社会階級としては、法廷弁護士、聖職者、陸軍士官などが、中流階級の最上位で、中流中層階級は、プロフェSSIONズ、裕福な商人、大学教師となり、実生活の豊かさと社会的位置にずれがあることがわかる。

そして、下層階級はおよそ1,347,000世帯であった。

この階級の中で、中流階級の成功者たちは、貴族階級に限りなく近づくことを望み、過剰なほどの装飾家具や、装飾品で身邊を飾り立て、また貴族と同じような生活を送ろうとすることで、自らの富と社会的地位を誇示した。これは「衒示的消費 (conspicuous consumption)」という言葉で表されている。すなわち、これらはすべて、貴族階級に対する憧れと劣等感、同じ中産階級の人々に対しての成功者としての誇り、つまり差異をつけられている者の「差異化への欲望」をあらわしたものであって、ガヴァネスを雇うこともこの範疇に入る。また女性の地位、結婚に対する考え方も当然影響を受けた。

産業化によって、家庭内で中流（上流ではない）の主婦たちの立場は経済的

に無用の存在と化した。古い時代の社会における家庭内産業は、夫婦合同の労働によって成り立っていて、いろいろな種類の事業や職業や商いが共同経営体をなし、そこでは夫婦がひとつのチームとしてともに働いていたのである。ところが生活水準の向上と専門家の進展は、それまで彼女らが家庭内で参加してきた仕事の大半を女性の手から奪い取ってしまったのである。家事は召使が、家庭内の事業には、事務員や店員が肩代わりを勤めるようになったからである。一方男性中心の職業が男を家庭から引き離し始めると、家庭は女性占有の領域になっていった。その家庭はだんだんとひどくなり出した過酷な商業文明における道徳的価値を最後を守る場として感傷化され、理想化されるようになった。それは主婦のことを「家庭の天使」と呼んだことにも現れている。夫婦の分離はこの時代の特徴である男女の役割の分極化を促した。また性別のステレオタイプ—男性はたくましい、能動的、女はか弱い、受動的等—の表現を生み出すことにもなった。中流階級の女性は、上流階級のような「完全なレディ」—有り余る暇を持ち、装飾的で依存に甘んじ、賞賛を呼び起こすことと出産以外には、果たすべき役割を持たない妻—になるよう努めた。子育ては乳母が、教育はガヴァネスに任せるようになっていた。ガヴァネスは、女性としての教養的たしなみ(accomplishments)を女の子教えるために雇われた。そのためにはガヴァネスがレディでなくてはならない。ここにたしなみを持つレディでありながら、雇われるというガヴァネスの微妙さが生じてくる。

レディならば本来働かずに、しかるべき結婚をする状況にあるはずなのになぜガヴァネスという職を求めたのであろうか。経済的には先に引用したレディ・イーストレイクが述べているように、中流階級であっても下層階級に近い人は収入の道が途絶えると、女性は、食べるために下層階級労働ではないガヴァネスの職を求めた。また結婚しようにもこの時代は結婚が彼女たちにとって難しい時代であった。バンクス夫妻著、『ヴィクトリア時代のイギリスにおけるフェミニズムと家族計画』⁽⁷⁾によると、この時代は女性の総数が男性の総数より約51万人多かった。15歳以上の独身女性は、1851年センサスでは2,765,000人、1861年は、2,956,000人、1871年3,228,700人で、この間15歳以上の独身女性数と独身男性数の差、すなわち、配偶者を持たない、あるいは持つ見込みのない女性数は、72500人から125200人と増加している。この女性たちは、余った女たち(odd, surplus, or redundant women)という呼ばれ方をした。このアンバランスの原因は、1)男女の死亡率の相違(1841年頃の平均寿命;男子

40.19 歳、女子 42.18 歳) 2) 海外に移住に関する両生間の相違 (永久移民の約 6 パーセントが中産階級の男性)、3) 上流および中流男性の晩婚の傾向 (1874 年アンセルの記録によると、1840 年と 1870 年の間の平均結婚年齢—牧師、医師、弁護士、貴族、商人、銀行家、製造業者、ジェントルマン—は、29.93 歳) という。作家の中にもこの数字を取り上げた人もいた。

ジョージ・ギッシングの『余った女たち』(1893 年)

「でもね、この結構な国では女の数が男より五十万人も多いことをご存知かしら？」

「五十万人ですって！」

モニカの率直な驚いた様子がまたロードの笑いを誘った。

「そのくらいの数だそうよ。そんなにもたくさんの半端な女たちがいるのよ—お相手無しのね。悲観論者はそういう女のことを、役立たず、救いようのない、無用の存在だと見ているわ。私は自分自身がそういう女の一人だけど…そんな見方をしていない。そういう女たちは、働く女の大予備軍だと思うの……」⁽⁷⁾

また、W.R.グレッグも「なぜ女は余っているのか」『ナショナル・レビュー』(1862) で「端数を切り捨てた数字を挙げると、英国には百五十万人の未婚の女性がいる。このうち五十万人は植民地で必要とされている。あと五十万人は家事使用人として、人の役に立ち、かけがえのない人間として幸福な仕事につくことができる。…実際に何とかしなければならないのは、残る五十万人である。」⁽⁸⁾と述べている。

こうした結婚の当ての外れた独身女性は、相対的に上流階級および中産階級に最も多かったらしい。上流または裕福な中産階級の女性は、屈辱的ではあっても未婚のまま親がかりで暮らせたが、中産階級で、父親の死、病気、失業、あるいは事業の失敗などによる一家の経済危機のために職探しをしなくてはならないそれまでレディと呼ばれてきた女性にとって恥ずかしくない (リスペクタブル) とみなされた唯一の職業はガヴァネスであった。ガヴァネスの数は 1851 年センサスによると、21373 人 (1861 年には、25000 人) とかなりの数である。

4. ガヴァネスの実態と「ガヴァネス」小説

ガヴァネスに適した年齢は、25-30歳と考えられていて、40歳もしくは35歳で引退を考えなくてはならなかった。年齢条件ばかりでなく職業としてのガヴァネスの状況はかなり悲惨なものであった。たとえば、「現代家庭教師の心得」『フレイザーズ・マガジン』1844年11月号には、平均年収がたったの35ポンドしかない家庭教師が、甘やかされた子供の相手をたった一人でさせられ、それが終わると、これまた一人で勉強部屋に引きこもることを余儀なくされているという実態を、同情も交えながら詳細に描かれている。また、その日記と手紙が当時のガヴァネスの求職方法、給料、仕事内容、心情を伝える貴重な資料となっているミス・エレン・ウィートン（1775?～1850頃）は、彼女の雇われ先であるアーミテッジ家での一日を「朝七時から夜七時半ないし八時までまったく子供たちに取りられています。私は朝六時以降は寝てはいられません。だから縫い物や書き物など自分のことをしようと思えば、もっと早く起きなければなりません。』⁽¹⁰⁾と述べている。ガヴァネスには自分の時間はなく、子供たちの管理に非常な努力が要求された。

女性についての一連の評論を書いたアナ・ジェイムスンも、ガヴァネスの惨めな状態について「裏の階段を昇って行くと、いくつか小さな部屋がある。それらは、狭苦しく陰気な様相を呈している—勉強部屋には家具はほとんどない—カーペットは色あせ、繕いが施されている—まるで懺悔をするための部屋であるかのように堅い背もたれ椅子—壁側に大きなテーブル—ヨーロッパの地図と年表—貧弱さ、冷たさ、無装飾—それらは家庭というものになれた女性を瞬時にしてがっかりさせることであろう…」⁽¹¹⁾

ミス・エレン・ウィートンの1812年8月18日手紙によると「ガヴァネスの立場は少しでもものを考えたり感じたりする女性には非常に居心地の悪いものです。ガヴァネスには人との交わりといったものがほとんどありません。召使たちと付き合う気にはなれませんが、雇い主や客たちからは対等に扱われませんので、平静を保ったり豊かな気持ちでいるには、毅然たる精神が必要です。」と、ガヴァネスの立場の微妙さ、あいまいさが述べられている。ガヴァネスの立場は、召使でありながら召使とは同等ではなく、レディといわれても主人と同等でもないという非常に矛盾に満ちたものであったことがわかる。

中流階級の「貧しい親戚」と呼ばれたレディと労働者階級の狭間に挟まれた

ガヴァネスの境遇は、階級制度のもろもろの齟齬や矛盾を探求するのに格好の材料となっていていわゆる「ガヴァネス文学」がおおいにもてはやされるようになった。それは、1800年には、スコットランド 88%、イングランド、ウェールズ 65% となった識字率にも示されるように、字が読める人口の増加とあいまって、自由な時間が増えてきた中流階級のある程度の教育を受けた女性たちが読者となり求めたジャンルであった。その小説の中心にはガヴァネスをヒロインとして中心に据え、従来の小説で男性主人公が親戚、知人の助けを借りずに独力で人生を切り開いていったことを、社会的なアクセスを持つ女性、ガヴァネスを経験していくことがテーマとなった。Kathryn Hughes は、ガヴァネスを小説の主人公にし易い点として「①男性ヒーロー同様の人生の旅路をたどれる位地にあった。②女性であるが故に、結婚という結末で、本来女性があるべき家庭に落ち着かせることが可能であった。これは、男性主人公の社会的成功と同じことを意味した。③中産階級の家から出られない女性達に教室で味わえない人生を体験させてくれる手段であった。」と次のように述べている。

On the one hand, she was as orphan, propelled by economic circumstances into taking a moral, geographic and social journey similar to that of any male hero. On the other hand, she was a middle-class woman who could be re-incorporated at the end of the narrative into the domestic sphere, the proper realm of women, by means of a conventional marriage plot. Winning a husband who could restore her to her rightful social position, if not a advance it a little, represented a reworking of the hero's goal of economic self-sufficiency, while still resisting any challenge to a social order which insisted upon women's financial dependence on men.

Novelists used a governess to explore far more than life in the school-room. As a lady who was exempt from some of the more constricting aspects of ladyhood, she represented the perfect place to mount an enquiry in to the social and moral codes which middle-class women were increasingly obliged to observe.⁽¹²⁾

以上のような状況の中でシャーロット・ブロンテによって書かれたのがガヴァネスを主人公にした『ジェイン・エア』である。スミス・エルダー社から1847年に初版が出されると、たちまちベストセラーとなって、五ヶ月で3版を重ねるほどに人気であった。

5. ガヴァネスとしてのブロンテ姉妹

シャーロット・ブロンテ自身も、最終的に作家となる前、まず家庭教師を試み、学校経営も試みている。彼女は1835年7月29日～1838年5月23日 Miss Wooller's school の教師、1839年5月～7月19日 Sidgwick 家のガヴァネス、1841年3月2日～12月中旬 White 家のガヴァネス(給料年20ポンド、洗濯代を引いて16ポンド:c.f. ハウスキーパーは20-45ポンド、奥様つき女中は12-25ポンド)を勤めているが、いずれも短期間である。ガヴァネスを勤めきれないことを彼女は次のように手紙を書いている。

エレン・ナッシーへの手紙(1839年、6月8日)⁽¹³⁾

「私は、この前の手紙で、シジウィック夫人が私のことをわかってくれないと述べました。今私は、夫人が私のことを理解しようとする気がないということに気がつき始めました。夫人が私について気にかけるのは、私から最大限の量の労働をいかにして搾り取るかということだけです。そのために彼女は、山のような針仕事を、縁かがりする何ヤードもの麻布を、仕上げるべきモスリンのナイトキャップを、それに特に人形の服作りを私に押し付けて困らせるのです。…私は、私的ガヴァネスにはまったく自分の生活がないということを以前にもましてはっきりと理解できます。ガヴァネスは生きた人間、理性的存在とはみなされず、ただ果たすべき退屈な義務と結び付けられた存在に過ぎないので。」

また、1841年5月4日エレン・ナッシーへの手紙でシャーロットは、ガヴァネスとして働いていたホワイト氏によるシャーロットの父親を同家に対する招待について、憤りを持って書いている。以前より、彼女はホワイト家を自分たちよりも社会的に一段低い人としてみなしていたので、‘I don't at all wish papa to come, it would be like incurring an obligation.’ 借りは作りたくないということであろうか。彼女はこの招待を個人的生活に対する干渉と受けとめたのだ。彼女は、ガヴァネスと雇い主との関係を、上下関係で捉えたくないのだ。

『ジェイン・エア』の中では、ミス・イングラムに、「家庭教師の話題なら、お母様の意見を聞いてくださらなくては。メアリーと私は子供のころに、そうねえ、少なくとも一ダースくらいの家庭教師につきましたわ。そのうちの半数

はぞっとする連中で、残りの半数は途方もない連中だったわ。どれもこれもお荷物…」「まあ家庭教師のことなど話題にしないで頂戴。家庭教師と聞いただけで、いらいらするわ。あの連中の無能力と気紛れのせいで、ひどいめにあわされましたよ。ありがたいわ、あの連中と縁が切れて。」と言わせているが、ここで注意しなくてはいけないのは、これは、ジェインが軽蔑しているイングラムの言葉であるということだ。イングラムの人を人とも思わない傲慢さを表している。裏返してみれば、カヴァネスの雇い主のひどさがここに出ている。表面は優雅でも内なる心は傲慢、空疎なイングラムが描かれ、ガヴァネスという立場であっても自信と自尊心を持っているジェインと対比させている。ジェインと作者シャーロットを重ね合わせると、彼女のガヴァネス観—自己を失わず、挑戦していくガヴァネス—がわかる。

シャーロットのガヴァネスとしての経験はあまり長くないのに比し、妹のアンは、1841年3月から1845年3月までロビンソン家でガヴァネスをしている。彼女に比べれば一か所でそれも長い期間に渡りガヴァネス生活を送っている。ここにアンとシャーロットのガヴァネスに対する描き方の違いが出てくるのだろう。1847年に書かれたアン・ブロンテの小説『アグネス・グレイ』における主人公のガヴァネスの描かれ方を見てみよう。

牧師の娘アグネスは最初にもと小売店主のミスター・ブルームフィールドの三人の子供を教える。子供たちは三人とも強情で言うことをきかず、強力な権限を持ち、子供に肩入れをする両親からの協力が得られず、彼女の子供をしつけようとする努力は実を結ぶこともなかったが、アグネスはこうした屈辱の日々にあっても、自分の心を表面には出さず、忍耐の日々を送るが、心深く自己の道徳的優越に確信を持ち、自分を見失うことはなく、人間としての誇りを失わない。アグネスの役割は真実を語ることでガヴァネスの立場を通じて見えてくる世俗的価値を批判する役割である。次の勤め先のホートン・ロッジの地主マレイ家では、お給料も前回の20ポンドに比し、50ポンドとよくなったが、アグネスはここでもまた、道義を貫き自分の好みよりも義務を優先する。ロッジ家の長女ロザリーは、男性をひきつけることだけに心を砕き、表面的価値である社会的地位と財産を選び、レディ・アシュビーになるが、身分と財産を条件とした結婚は、憎しみ合う不幸な結婚生活に終わる。アグネスは副牧師のエドワード・ウェストンとの間に誠実な愛を育て、愛と尊敬を絆とする理想の家庭を築く。以上があらすじであるが、アンは具体的な場面を生き活きと写実し、

読者に臨場感を与え、皮肉を感じさせる。そして、率直だけれども冷静な写実的態度、畳み掛けるような注意という形での要約的説明の積み重ねの中から、アグネスの深く傷つけられた心と、静かにではあるが侮蔑を含んだ憤りが伝わってくる。その表現は決して激しい感情の吐露ではない。

「あの仕事、そうだ、手に負えないほど乱暴な反逆者たちの群れの世話と監督を任されると言うような、こんな惨めな気持ちを少しも味わったことのない人には、想像もできないほど骨の折れる仕事だった。その上、どんなに努力したところで、彼らに自分たちの義務を守らせることはできないし、それでいて、もっと強い権力を握っている親たちの方は、子供の責任はすべてこちら側にあると思っているのだ。親は目上の者が保持するもっと強力な権威の助けなしには達成できないようなことを、こちら側に要求してくる。そのくせ彼らときたら、面倒くさいからなのか、あの反逆者どもの一味に嫌われるのがいやだからか、ともかく絶対に助け舟など出してくれないのである。これほど煩わしい仕事はそうざらにはないだろう。第一、うまくいくように願ったところで、義務を遂行しようと努力したところで、その努力は生徒たちからは裏切られ無視され、親たちからは不当に非難され、誤った判断を下されるのが関の山なのだ。」(第四章)

アンの語り口は、きわめて客観的である。控えめな語り口ではじまるが、それが少ずつ層になって、いつの間にか一人の人間の誇り高い自己主張の叫びになっていく。静かな迫力を持つので却って強い訴えとなる。ウェストンとの真実の愛、相互理解、敬愛に基づいた結婚は明らかに、ロザリーとの対比である。アンはガヴァネスの惨めな扱われ方を写実的に描き、その場をじっと耐え忍ぶことでこの時代のガヴァネス像を映し出しているといえる。これはアン自身がガヴァネス職を転々と変えなかったことにも表れているといえよう。

シャーロットの経歴からは、自己の強さがはっきりと表面に出ており、いわば「戦うガヴァネス」像が浮かび上がる。そのころのガヴァネスのイメージであった「耐え忍ぶ」(suffer and be still)ということからはほど遠いイメージである。後者のイメージにはアンがあてはまる。この点で『ジェイン・エア』に対する同時代人からの批判が生まれてくる。

6. 『ジェイン・エア』に対する批判

「ジェイン・エアには「手に負えない精神」、すなわち「神を恐れぬ不満」が具現されている。ジェインは「低俗な」人間で、「私たちが知り合いにはなりたくない、友人に欲しくない、親類になってもらいたくない。ガヴァネスには絶対に雇いたくない女性だ」とレディ・イーストレイクは、『『虚栄の市』、『ジェイン・エア』およびガヴァネス互惠会』（1848年）で述べた。⁽¹⁴⁾

川本静子は、ジェインは、既成の秩序と規範を脅かす信念と性格を持っていたと述べ、さらに「レディ・イーストレイクがジェイン・エアに嗅ぎ取った危険な要素とはこのヒロインの物語を通して「絶えず主張される高慢な人権思想」であった。彼女によれば、このガヴァネスには、「頼る人とていない、文無しの孤児」という神の定めた己の運命を甘受する謙虚さが欠落しており、その「神を恐れぬ不満」は、「法曹界や宗教界など、現今の文明社会が事実上総力を挙げて戦わなければならない、最も顕著な。かつもっとも狡猾な悪だ」というのである。…彼女は、このガヴァネスの物語に、体制の転覆を企てる当時の革命思想に通底するものを嗅ぎ取ったのだ。」⁽¹⁵⁾と言う。

ミセス・マーガレット・オリファントは、『ブラックウッズ』の「現代小説家」の書評で、『『ジェイン・エア』は、初めて男性と対等に張り合うことを主張したばかりでなく、もし正当な扱いが受けられなければ自分の権利を主張するために文字通り「一対一で取っ組み合って」戦うことも辞さないという「攻撃的で扇情的な」ヒロインの到来を告げる作品である。』『『私は彼に捕らえられてもよい。抑えつけられてもよい。打ち負かされてもよい。もし彼が私よりすぐれた人間であるならば。—最後まで戦いましょう、彼の武器に対しては私自身の武器を使って。そしてどちらが強いのか確かめましょう』』というのが『ジェイン・エア』のヒロインの信条なのだ。』『そのほうがよいのですか？ 優しき殿方たちよ。—あなた方は彼女の頭を叩き割って勝利を得たいと思いますか、それとも彼女をそっとしておいたまま愛したいとお考えですか？』と読者に問いかけた。⁽¹⁶⁾

ダニエル・ブールによると「アメリカのボストンでは読者の何人かが「不道德」という理由で返しに来たという。また、レディ・ハーシェルがジョージ・スミスの客間に『ジェイン・エア』があるのを見て、「あなたはこんな本をほったらかしにしておくのですか。あなたのお嬢さんが読むかもしれないというの

に」と、非難するように尋ねたそうである。』⁽¹⁷⁾『ジェイン・エア』の与えた衝撃は、階級に関する限り既存の枠内にとどまっているものの女性を男性に従属するものとしてではなく、男性と対等なものとして主張する点が革新的であったのだ。また、従来であれば美しい女主人公、その相手は美男子で家柄のよい男性という設定を覆し、18歳の器量のよくないジェインと中年の美男子でないロチェスターとしたところも驚きをもって迎えられた。ここにもシャーロットの意図が覗える。このシャーロットの描くガヴァネスの独自性を探ってみよう。

1. 『ジェイン・エア』のガヴァネスの独自性

『ジェイン・エア』と『アグネス・グレイ』では、女性の経験の質について物語の話し手であるガヴァネスである主人公の心の中の葛藤として描いている。ただ、『アグネス・グレイ』がガヴァネスを社会的存在として、社会的関係においてガヴァネス個人を捉え描いた。すなわち、アグネス・グレイは、あくまでも社会的にあいまいな位置でのガヴァネスとして自分を捉えているのに対し、『ジェイン・エア』ではそうではない。ガヴァネスであるジェインが、孤独の中にも、自分の力で自分を確立していく姿を描いている。ジェイン・エアが、心の充足と魂の伴侶を求めて「私は愛する」「私は憎む」と叫び、自分の心に正直に感情を表明する。作者シャーロットの時代が理想とする女性ではない。‘suffer and be still’ とじっと我慢している、ガヴァネスでもない。ガヴァネスはジェイン自らが自立のために選んだ職業なのである。彼女は、8年間（6年間は生徒、2年間は教師）いたローウッドの教師を自ら辞める決心をして、ガヴァネスになる広告を新聞に出すのだ。その気持ちは、ジェインが窓辺に行きローウッドからはるばる遠くを眺め、外の世界への憧れを述べるところに表れている。

now I remembered that the real world was wide, and that a varied field of hopes and fears, of sensations and excitements, awaited those who had courage to go forth into its expanse, to seek real knowledge of life amidst its perils. …School rules, school duties, school habits and notions …such was what I knew of the existence. And now I felt it was enough. I tired of the routine of eight years in one afternoon. I desired liberty; for liberty I gasped; for liberty I uttered a prayer ⁽¹⁸⁾

また、シャーロットは、作品『教授』の序文で、

「私は、心の中でこう思った——私の物語の主人公たちは、現実の生きた人間たちがしているのと同じように、働いて人生を切り開いていかねばならない——自分で稼いだのでなければ、びた一文手にすべきでない——運命の急転によって、一瞬のうちに富と高位を得たりすべきではない、つまり、いかにわずかの資産を得るにしても、額に汗してかちとらねばならない。…『苦難の丘』の上り坂の少なくとも半分は征服していなければならない、」と述べている。この運命を切り開いていく態度、自己実現への強い衝動は、『ジェイン・エア』のさまざまな場面に出てくる。

次に挙げたのは、ソーン・フィールドでの待遇が非常に恵まれたものであったにもかかわらず、働き出して間もないころ屋根裏に上って館から外の世界を眺め、ジェインが自分の心情を述べるところである。

...I valued what was good in Mrs Fairfax, and what was good in Adele; but I believed in the existence of other and more vivid kinds of goodness, and what I believed in I wished to behold./Who blames me? Many no doubt; and I shall be called discontented. I could not help it; the restlessness was in my nature: it agitated me to pain sometimes... It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquility: they must have action: and they will make it if they cannot find it... Women are supposed to be very calm generally: but women feel like just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; ...and it is narrow-minded in their privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than pronounced necessary for their sex.⁽¹⁹⁾

ここでは、自分のものを見る目に自信を持っていること、自分の中にひとところにとどまれない前に進みたいという気持ちのあること、自分は女であっても人間であること、女も男と同じように感じ、開拓すべき未来も男性同様持っていることを訴えている。このジェインは社会構成上位置するガヴァネスではなく中産階級の女性として意見を述べている。

重婚であることが発覚して結婚が取りやめになった時、それは、ジェインを

愛するあまりとった行動であると、ロチェスターの元にとどまるべきか逡巡するが、愛人になってくれと懇願する彼に従わず、彼女は自分の心を尊び、自己を貫抜いてソーンフィールドを立ち去る。ジェインはロチェスターとの関係をガヴァネスと雇い主としてみない。自分は弱い立場、従属的立場、悲しい立場と自己を哀れまない。

I care for myself. The more solitary, the more friendless, the more unstained I am, the more I will respect myself. I will keep the law given by God: sanctioned by man. I will hold to the principles received by me when I was sane, and not mad—as I am now.⁽²⁰⁾

この感情の真正さを絶対的に信頼し、追い求めていく態度、言い換えると、既成の慣習をものともせず自分に忠実であろうとする態度は、出来上がっていた社会習慣従属に対する自然の生き方の勝利とみえる。それは既成に対する挑戦として受け止められた。フェアファックス夫人の、「ああいう身分のある方が、ご自分の家のガヴァネスと結婚なさるなんて、例のないことでございますからね。」という言葉から見ても、シャーロットの慣習に対する反逆的態度が伺える。また、ミス・イングラムのガヴァネスに対する軽蔑の言葉があっても、弱い立場のガヴァネスという見方はしない。ロチェスターを魅惑しようとする彼女の努力がことごとく失敗するのを鋭く見て、両者の間にジェインが考える真の愛情といえるものの存在がないと理解する。結局ロチェスターの愛を勝ち得たのは、文無しの社会的地位も低いガヴァネスであるジェインであった。これは、結婚の動機を利害や姻戚関係に見出す観念に対し、情熱と感情の一致を男女の絆として何よりも重視する観念が打ち勝ったといえる。ガヴァネスと雇い主が、それぞれの知性と心、血と神経の中に流れるもの的一致によって結ばれる姿は、対等な男女関係を理想するシャーロットの夢の実現であったと言えよう。また対等な男女関係というのは、その当時の女性に望まれていた、「家庭の天使」の役割—女性は男性に従い保護され、家庭を守るもの—の役割、男は強く、女はか弱いという既成概念に対するシャーロットの友論である。対等になるためには経済的自立が必要条件となる。経済的自立は、精神的自立の当然の前提条件である。ジェインが、イギリス小説に職業人として登場する最初のヒロインであることも、こうした同権意識の副産物といえよう。ジェイン以前の小説のヒロインもしくは登場人物で、ガヴァネスなどの職業につく人はいたけれど、それはあくまでも夫が出現するまでの方便であり、それ自体が自立する

ための目的となっていなかった。言い換えると真に求める職業は結婚であったのだ。ただ、作者シャーロットは、ジェインがロチェスターと最後に結ばれるときに、彼女には尊敬に値する階級の親戚を与え、また叔父からの遺産 5000 ポンドを得た経済的に富裕な状態にしていることと、ロチェスターが視力を失い、左の腕も失い、ジェインの助けなしには暮らしていけない状態にしたことは注目すべきである。ジェインがジェントリー階級であるロチェスターと対等になるためには、このような条件が必要であると、シャーロットは思ったのではないだろうか。ここにガヴァネスであっても、人間として対等というジェインの主張だけでは、結論を出せなかったシャーロット・ブロンテの限界、彼女の生きていた時代の制約があるように感じられる。いずれにせよ、ジェインは、はじめから孤児であっても一応ジェントリー階級—もちろんロチェスターよりも収入財産の規模ではずっと下に属する—のリード家に親戚として引き取られるわけであるから、出身は召使等の労働者階級ではない。また学校での成績のよさで教養も十分備えている。このことから真の対等とは何かと考えたときに、時代の制約が入ってくるようだ。ロチェスターと結婚するためには、少なくとも、准レディとも言うべきガヴァネスである必要があったことは確かであり、そこに、さらに階級的にも対等となるために更なる条件を付け加えていったのではないだろうか。また、最後には家庭を守る「家庭の天使」としてのジェインとしたところも時代の枠組みの中から抜け出せなかったシャーロットの限界といえるのではないだろうか。ただ、夫のために家を守る妻ではなく、同等に協力し合う妻としたところはこの時代にはない新しさといえるのだが、そのためにロチェスターの体にハンディーを負わしたところにも彼女の限界が感じられる。

註

- (1) *Jane Eyre*, Bronte, Charlotte, Penguin Classics, 1966, p.120
- (2) *op.cit*, p.121
- (3) 『歴史のなかのガヴァネス』、アリス・レントン、河村貞枝訳、高科書店、1998
- (4) 『ガヴァネス』、川本静子著、中公新書、中央公論社、1962
- (5) *op.cit*, pp.11~12
- (6) 『大英帝国』、長島伸一著、講談社現代新書、講談社、1996
- (7) 『ヴィクトリア時代の女性たち』、バンクス夫妻著、河村貞枝訳、創文社歴史学叢書、1980
- (8) 『遙かなる道のり』、北条文緒・クレア・ヒューズ・川本静子編、国書刊行会、1989、p.82, 引用より

- (9) op.cit, p.81, 引用より
- (10) 『歴史のなかのカヴァネス』、第7章「退屈な日常」から
- (11) op.cit, p.176 引用より
- (12) Victorian Governess, Hughes, Kathryn, Hambledon and London, 1993, p.3
- (13) 『歴史のなかのカヴァネス』、pp.129～130
- (14) 『カヴァネス』、p.123～4
- (15) op.cit, p.125
- (16) 『ディケンズの毛皮のコート/ シャーロットの片思いの手紙』、プール・ダニエル、片岡信訳、青土社、1999、p.98
- (17) op.cit, p.99
- (18) Jane Eyre, p.116～7
- (19) op.cit, p.141
- (20) op.cit, p.344

参考図書

- 『イギリス国民の誕生、リンダ・コリー』、名古屋大学出版会、2000
- 『イギリス フェミニズムの背景』、西村貞枝、思想7、岩波書店
- 『イングランド女子教育史研究』、滝内大三、法律文化社、1994
- 『概説イギリス文化史』、佐久間康夫他、ミネルヴァ書房
- 『カヴァネス』、川本静子、中公新書、1962
- 『ディケンズの毛皮のコート/シャーロットの片思いの手紙』、ダニエル・プール、青土社
- 『十九世紀 イギリスの小説と社会事情』、J.P.ブラウン、英宝社、1987
- 『19世紀のロンドンはどうな匂いがしたのだろうか』、ダニエル・プール、青土社、1997
- 『女性自身の文学』、E.ショウォールター、みすず書房、1993
- 『大英帝国』、長島伸一、講談社現代新書、1996
- 『楽しめるイギリスの文学』、ミネルヴァ書房
- 『誰がズボンをはくべきか』、マイケル・ハイリー、ユニテ、1986
- 『デザインの国イギリス、ウェッジウッドとモリスの系譜』、山田眞實、創元社
- 『遙かなる道のり イギリスの女たち』北條文緒他、国書刊行会、1989
- 『ヴィクトリア時代の女たち』、バンクス夫妻、創文社歴史学叢書、1980
- 『ヴィクトリア朝百科事典』、谷田博幸、河出書房新社
- 『歴史の中のカヴァネス』、アリス・レントン、高科書店、1998
- The Victorian Governess, Hughes, Kathryn, Hambledon and London, 1993
- The Victorian governess, Horn, Pamela, History of Education, 1989, vol.,18, NO4
- The Victorian Governess, Peterson, M. Jeanne, Suffer and Still Women in the Victorian Age ed., Vivinus, Martha, Indiana University Press, 1972
- Jane Eyre, Bronte, Charlotte, Penguin Classics, 1966
- 『ブロンテ研究』、青山誠子、中岡洋編、開文社、1983
- 『ブロンテ三姉妹』、テリー・イーグルトン、大橋洋一訳、晶文社、1991
- 『ブロンテ姉妹の時空』、中岡洋、内田能嗣共編著、北星堂、1997
- 『ブロンテ・ブロンテ・ブロンテ』日本ブロンテ協会編、開文社、1989